
テンプレワールド～魔王は退治されたくありません～

西美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレワールド〜魔王は退治されたくありません〜

【Nコード】

N6185Z

【作者名】

西美

【あらすじ】

定番の剣と魔法の世界の物語。ネットで連載される小説の作者は中学生。

その物語の魔王と攫われた姫の替え玉は、物語に不満を持ち二人で反乱する。自由を求めるために。物語とは違う裏の物語。二人はその世界に自分達を解放する自由を求める旅に出る。それは閲覧者がいない時間。そして出番のない時間。限られた時間の自由に二人が見つけた答えは。

自由になりたい(前書き)

勇者〓モナ

城の姫〓ココア

魔王〓サウロ

姫の替え玉・宿屋の娘〓プリン

これは中学生がネットにて連載を始めた物語の裏の物語。

自由になりたい

その世界はある中学生が気まぐれに作った世界。

剣と魔法の定番の世界でヒネリもなく

世界は作者の思うがままに進行する。

そう、勇者モナが城の姫ココアを攫った魔王サウロを退治に行く話
ネットで公開されたその話は長編で、ゆっくりと話が進む。

そして登場人物達も作者に運命を託して演じきる。

「だからなんで私が身代わりになるのよ!!」
そう女が喚く。

正確には攫われたココア姫。

金の髪を必死で振り回し、体を縛る戒めを解こうとする。

それを、うんざり顔で見ているのが、攫った張本人。

この世界の最強にして最悪の魔王サウロ。

だがサウロはうんざりしていた。

「仕方ないだろ、そういう設定なんだから」
大きいため息をつく。

見た目は変身前なので普通の美形キャラだ。

だがサウロは予感している。

どうせ変身してドラゴンとかになったりするんだろ。

でもって無敵の勇者の光の魔法で最後は退治されるんだ。

ハァ〜と大きなため息をつくサウロ。

それを見てココア姫は怒鳴る。

「ちよつとため息つきたいのは私の方なんだけど!!」

サウロはチラリと緑の目でそれを見て、またため息をつく。

現在は誰も読者がこの話を見ていない。

だからこそ、つかの間の自由なのだ

どうも攫ってきた女がうるさくてたまらない。
こっちも好きで、こんな事しているわけではない。

「だからさ、私は替え玉なんだって
必死で訴える。」

「町娘なの！！宿屋の娘なの！！なのに金髪だからって
これはあんまりじゃない？」
自分に言われても困る。

サウロは黒い長い髪をグシャグシャとかき乱す。

「どうせ、勇者はお前を助けに来るさ、それでいいじゃないか」
慰めつもりだったが、火に油を注いだらしい。

「それで本当は姫じゃなかった。でも愛してるって低脳過ぎるわ」
「俺に言われても」

「本当、この話って馬鹿みたい」
ここで嘆いて文句言っても仕方ないのだ。
全ては作者の手のひらの上。
いきなり世界に光がともる。

閲覧者が来た合図だ。

「はははは、姫よ、そう脅えるでない」

「やめて…助けて勇者様」

ブルブルと震える娘に魔王は、その手を伸ばす。

「お前は勇者を呼び寄せる餌だ。だから大人しくしていよ」

「やめて」

「勇者を倒し、そして世界を暗黒の闇に落とす！！」

「いやーっ！！」

泣き叫ぶココア姫の替え玉は、自らが別人だと告げる以前に
その魔王サウロの恐ろしさに震えるばかりだった。

つづく…

フツと光が消える。

「あー面倒くさ」

姫の替え玉が言う。サウロもうんざりだった。

「おい、ところでお前名前は？」

「私？プリンよ。嫌になるわよね、ダサイ名前」

あーヤダヤダと舌を出す。

先ほどまでの演技とは別人だ。

「しかも、この後の展開知ってる？」

「いいや、俺は倒されるんでな」

「その後は最悪よ。勇者が私と姫との三角関係に悩むの」

「ふむふむ、それで？」

「そつから先はまだ作者も悩んでるみたいだけど

最悪のパターンは二人共に恋人になってハーレム展開よ」

「ほーっ、それは男のロマンだな」

「馬鹿じゃないアンタ」

サウロが目をむく。さすがに魔王に向かって馬鹿はない。

「女をなんだと思ってるのよ！！」

「いや：死ぬ運命の俺からすれば生きれるだけでも幸せだろう」

「あんたは見せ場あるじゃない」

「それでも最後は無様に死ぬ予定だ」

そして自分が死んで世界は幸せになるのだ。

無言で互いを見つめあう。

「私達つてなんだらうね」

「ともかく全ては作者次第だな。どうにもできん」

より深くため息をサウロはついた。

だがプリンは言った。

「あきらめないわ！！」

プリンが立ち上がる。

「とりあえず縄ほどいてよ」

「いや：また次の出番がきたら縛るのが面倒だ…」

「いいから、もう次の話の作業に作者が入ってるわよ」
確かに世界が少し、ゆったりと動き出したようだ。

二人は感じる。

この次の話の展開を。

「とりあえず勇者モナの出番で私達はちよつとオヤスミね」

「そうだな、やれやれだ」

縄を解いてやった後、肩をもみつつサウロが答えた。

そんなサウロの肩をバンと掴むプリン。

「なんとかしましょうよ！！」

「なんとかとは？」

肩をバンバンと何度も叩かれる。

「何かあるはずよ」

「いやだから無理…」

「あんだ本当魔王なの？あきらめ早すぎ！！」

こういうキャラにしたのは作者である。

「ともかく、自由になればいいのよ」

「自由：だと？」

一番サウロからは遠い言葉だ。

だが、なんと心地よい言葉なのか。

「あるはずよ：きつと：だから」

「だから？」

プリンはギツと何も無い宙を見上げる。

「自由になつてやるー！！」

「いや：だからどうやって？」

やはり、この女は苦手だとサウロは内心ウンザリしていた。

「ともかく自由なのよ、少しは」

言いたい事はわかる。

「ああ、次の出番はとりあえずないな」

「だから、とりあえずこの世界を探しましょう」

唐突の提案だ。

「探す？」

「そうよ、自由になるための手がかりよ」

「そんなものが…どうやって」

プリンが叫ぶ。

「あんたの魔法があれば、すぐにここに戻ってこれるわ」

「確かに…だが…」

「探せばいいのよ！！何もしないよりマシ。あんたはこのままでいいの？」

死んでいいの？馬鹿みたいじゃない、この話！！」

サウロは目をパチクリさせてプリンを見る。

確かに、だがあるのだろうか…そんな可能性が？

「何もしないよりマシか…」

「そう、どうせ話が進めば私達はまた縛られる」

つかの間の自由に自分達の本当の自由を探す。

作られた設定としての反乱。それは作者からみれば

ないはずの物語。

自分の進むべき設定は決まっている。

途中がどう変わっても最後は死ぬのだ。

「やってみよう」

サウロは覚悟を決めた。

やった！！とプリンが喜ぶ。

そして二人のキャラは秘密の物語を進める事になった。

自由になりたい（後書き）

見切り発車です。ポチポチ続けます。

とりあえずラストは決まっているので完結はします。

ビックリスライム

サウロの魔法で二人は世界に飛び出した。
と言っても、所詮は作品の世界の中。
まだ作られ始めのこの世界は曖昧だけれど
最低限の枠組みは出来ている様子だ。

「とりあえずモナが今演技している城下町はパス」
「だな…なら森しかないな」

サウロはプリンの手をとってワープする。
この時ばかりは魔王としての強大な魔力に感謝した。

二人が歪み、そして形はすぐに整えられた。
ついた先は森フィールド。

魔王と宿屋の娘は大きく深呼吸をする。

「こつやって少しでも自由に動けるのって最高」
上機嫌でプリンは背伸びをする。

「そつだな…さてどうするか」

「んーとりあえず誰かいないかな？」

「森にか？」

「まだ作者の設定では戦闘シーンしか設定してない森だけど」
何もしないよりはマシと二人は歩き出す。

想像の世界なのに、二人にとっては世界そのもの。
明るい日差しがサンサンとさして心地よい。
サウロも陰鬱な城よりは、幾分が気持ち良かった。
テクテクと二人はアテもなく歩く。

ガサリと音がする。

反射的にサウロはプリンを背に庇った。

彼女の設定は替え玉でしかなく、戦闘スキルなど皆無だ。

いきなり二人の前にスライムがプルプルと飛び出した。

サウロが手をかざし消し去ろうとする。

だがプリンがあわてて

「ちょっと殺したらダメ！物語が変わってバレちゃうじゃない」と止められて、手を引っ込めた。

だが、どうしたものか、スライムは戦闘態勢に入っている。

流石に魔王である自分がスライムごときに負けるのは嫌だ。

だが、攻撃が出来ない以上は防御するしかない。

思案にくれるサウロを無視してプリンはスライムに話しかけた。

「出番はまだだから落ち着いて」

スライムは少し震えた。

「私達が戦う相手じゃないでしょ？設定を思い出してプルプルとスライムは逃げた。

あえて追わず、二人で見送った後にサウロは深くため息をつく。

「助かったのか？」

「話せばわかるみたいね」

一人うんうんと頷くプリン。

「しかしあんたって本当鬱キャラよね」

「仕方ないだろ、こういう設定だ。お前こそ…」

「あら私は替え玉で姫様のライバルとしてお転婆にされたのよ」
少し悲しげに言うプリン。

森は静かだった。

少し世界が揺れる。作者の物語が動いたようだ。

「今回は更新が早いわね」
「だな」

作者の中学生のきまぐれな世界。
そして自分達はそこで生まれ翻弄されるだけの存在。

「って見てよ!!」

プリンが指差して叫ぶ。

魔王がゆったりと視線を向けたその先で。

スライムの集団が、二人に向かって走ってきていた。

「おい…これは…」

「知らないわよ!!」

固まる二人。

いざとなったら逃げるしかない。

やはり、あの城に大人しくいるべきだったかと自問するサウロ。

話が少し進む。二人はそれを感じ取る。

だが、スライムの集団攻撃などの設定は見当たらない。

スライムの設定は…

「ええええ!!キモイ!!これが合体?」

プリンの唾然とする目の前で

複数のスライムがプヨーンプヨーンと重なっていく。

そして全てが組体操宜しく重なると

ムニヨツ!!

と大きな音を立てて合体した。

「ビククリスライムだな。設定通りだ」

大きな一つのスライムがそこにはいた。

「魔王サウロ様ですな」

いきなりスライムに話かけられた。

「ああ、そうだが」

「魔王様に会えて感激です」

プルプルと嬉しそうにビックリスライムは体を揺する。

「どうしてこんな所にいるんですか？」

「いや、少し散歩をしてる」

悠然とサウロが答える。

「そうですか…しかし勝手に移動されたら…」

「いや、すぐに出番がきたら魔法で城に戻る」

「しかし僕達の王の貴方にあえて本当に嬉しいです
プルンプルンと体を再び揺らす。

「心残りがなくなった。ただ倒されるだけの役目ですからね僕は
その言葉にギクリとサウロは身をすくませる。

「あんたも一緒に行かない？スライム君」

プリンが提案した。

「おい…また何を勝手に」

「それ位は魔王の魔法でなんとかならないの？」

「そういう問題ではないだろう」

「このスライムも可哀想じゃない！！」

スライムは何を言っているのか？と不思議そうに二人を見る。

「スライム君を移動させる位はできるでしょ？」

「移動させるだけなら簡単だがな」

「なら一緒に連れて行きましょうよ」

二人で、ああだこうだと静かな森を賑わせていると
突然に世界に光が広がった。

「閲覧者！！」

二人が同時に声をあげた。

そしてビックリスライムも慌てて

「隠れて下さい」

と、プヨプヨと体で二人を強引に草むらに隠した。
そしてサウロが魔法を駆使する前に
本番が始まってしまったので見守るしかなかったのだ。

勇者モナが森に入ってきた。

城から近い森とはいえ、まだ世界にはモンスターがウジャウジャいる。

まだ経験地の低いモナはここでレベルをあげる事にした。
早速、森で一匹のスライムを見つける。

だが、勇者に脅えたのかスライムは逃げて行った。

「ふん、やはりスライムが一番弱いモンスターだな」

モナはそう独り言を言った途端に

今度は沢山のスライムがモナに向かってきた。

「なんだ！でも集団でもスライムはスライムだ」

勇者の剣を構えて、スライムを迎え撃つ準備をする。

「かかってこい！！何匹でも倒してやる！！」

スライムは重なり、そして巨大な一匹に変身した。

その名もビツクリスライム！！

驚いたモナだったが、自分の使命を思い出し勇気を振り絞る。

そして

「とりゃああああ！！」

剣をふりかざし突進して行った。

ザクザクと剣で切るも、プヨプヨとした体にはなかなか

傷が入らない。

そしてビツクリスライムはゆっくりとモナの上に覆いかぶさった。

「何をする！！うわあああ！！」

モナはその体の中に閉じ込められた。

「く・・・苦しい...息が...」

必死があがくモナ。そして消化をはじめよつとするモンスター。

「こ・・・こうなったら！！」

モナは魔力をこめて魔法を使う。

「ファイヤー!!」

ド・ドドド・ドカーン!!

ビックリスライムは木っ端微塵となりモナは助かった。

そう倒したのだ。

「ふう、さつき町で魔法を覚えて良かったよ」

こうして初めての戦闘に勝利した。

勇者モナは経験地を手に入れた。レベルが1つ上がった。

「さて、はやくお姫様を救い出さないと」

そうして次の目的地に向かうのであった。

続く

息をひそめていた二人はジッと見ていた。

画面が消えて閲覧者がいなくなった瞬間こそ自由の時間だった。

そして光りが消えた。

「ひどいっ!!」

プリンは泣いてスライムの残骸に走りよる。

手のひらにのせた液体は小さく小刻みにふるえ

そして溶けた。

「あんまりだわ!! なにも悪い事してないじゃない!!」

「仕方ないさ。モンスターは倒される生き物だ」

「だからって…」

納得がいかないプリン。

だが仕方ないのだ。ここはそういう世界なのだから。

「まだそいつは知能が低かった。何の疑問も持たずに

本来の役目を果たさせて良かっただろうよ」

土に穴を掘り、そこに残骸を入れてやる。

「生き返らせてよサウロ!! 出来るでしょ」

これみよがしにサウロはプリンにかぶりを振った。

「できると思うか？」

「…」

わかっているのだ。プリンも。

だが、そう言わずにはおけない気持ち。

「勇者ってヒドイよ」

「だが彼もそういう風に作られたキャラだから…」

自分も、そしてプリンも勇者も全て作られた設定。

それに忠実に生きるしかないのだ。

「後悔してる？ここに来た事…」

涙目でプリンはサウロに聞いた。

「いいや」

「本当？」

「とりあえず雑魚キャラとはいえ、こいつの墓を作ってやれた」

「うん」

なんとかプリンが笑ってくれたので安堵する。

「ともかく城に帰ろう。また出番が来るかもしれない」

「わかったわ」

二人は手を取って、自分達の舞台である魔王の城に帰還した。

城下町

魔王サウロの声が城に響き渡る。

「なんだと！！勇者が私を倒す旅に出ただと！！小賢しい！！」

バサリと黒いマントを翻し、サウロは忌々しそうな顔をした。

「たかが小僧一人！！とつと潰してしまえ！！」

そして振り返り、ココア姫を見て笑う。

「お前はここから勇者が死ぬ姿を泣いてながめるがいいわ」

「いやああああ」

空に黒い雲が覆い、そして稲妻が激しくなった。

まだまだ勇者モナの旅路は遠い。

つづく

「あー本当馬鹿馬鹿しい」

あーあ、背伸びしてプリンは立ち上がった。

「まあ、それが本来の自分達の仕事だしな」

「とりあえず今回の私のセリフはき్యాあくでした」

閲覧者が消えて出番が終わった二人は

つかの間の自由の休息に入る。

城内の黒い石畳の上に座り込み

プリンは金の髪を手で撫でた。

口を尖らせてサウロに言う。

とりあえず、まだ次の展開を作者が書かない限りは

動きようがなかった。

少しでも世界が作られれば、登場人物である二人には感じる事ができた。

それがまだない。

「暇だわ…城を探検しようにも、そこすら設定できてないし」

二人は行き詰っていた。

「ねえ、自由になったらナニしようか？」

唐突に答えづらい質問をしてるのがプリンの特徴だ。

「なってみないとわからん」

率直に答える。

「そつよね」

「お前はどうしたいんだ？」

んー…と額に手を当てる仕草はなかなか可愛いものだ。

「なってみないとわかんないわよね」

ただ二人は自分の運命をかえたいだけ。

きっとそれは創造物として願ってはいけない願い。

だけでも、二人はほんの少し動き出してしまった。

つかの間の自由を。

「このまま、ここにいても仕方ない事だし

前回にパスした城下町でも行ってみるか？」

スネるプリンを見かねてサウロが提案した。

途端にプリンがパツと笑顔になる。

「うん！！行く行く！！」

「だな、当分はあそこも舞台にならない様子だし。

気分転換にでもなるかもな」

「やったー！！」

その場でピョンピョンと跳ねるプリン。

どこか羨ましくサウロは見つめながら

「この姿ではさすがにダメだな」

と言ったかと思うと、その場でシュンと一回転した。

闇をまとった美青年の姿が一瞬にして平凡な町人にかわる。

「うわっ！！凄い！！そか、そんな設定もあつたのね」

「まあ、どこで使うのかは未定らしいがな」

「女に化けれる？他には？ねーねー」

「お前は私に何を求めているんだ？」

迷惑そうにプリンを諷めて、手を繋ぐ。

そしてサウロの魔法によって一瞬で城下町に辿り着いた。

勇者がスタートした城下町。

それなりの人で賑わい、一通りの店も並んでいる。

古いヨーロッパな町並みをイメージしたそこは

典型的なファンタジーの町並みだ。

二人はそこそこに広いその町を歩く。

「ねーねー、あれ城の中は入れないかしら？」

「無理だと思っぞ？試してみるか？」

二人で城門の前まで来る。

門番の兵士が立っている。

「ここは勇者様以外はお通しできません」

決められたセリフを伝える。

「ねえ、そんな事言わずに、今は誰も見てないしお願い」

プリンが可愛くねだつてみたが

「ここは勇者様以外はお通しできません」

「だから…」

「ここは勇者様以外はお通しできません」

「同じ事繰り返さなくてもわかってるわよ…！」

「ここは勇者様以外はお通しできません」

爆発寸前のプリンを制止してサウロが答える。

「ムダだ。こいつは決められたセリフしか言えない」

「知ってるわよ…でも今は出番じゃないじゃない」

サウロが少し悲しげに言う。

「だから、そこまでの自我が芽生えるキャラではないという事だ」

「どづいつ事よ」

プリンがサウロを見上げた。

目と目が合うが、サウロが先に視線を外す。

「このキャラはこのセリフを言うだけの背景みたいなものだ。」

だから我々のように自我が芽生えない」

「背景って……」

プリンが息を呑むのがわかった。

「思い入れというか、設定すらないんだ。この兵士には。

たぶん町の人間の大半もそうだろう。無意味だ」

プリンはドンと兵士を力強く押した。

だが反応した兵士は繰り返す。

「ここは勇者様以外はお通しできません」

サウロが聞く。

「どうしても入りたいなら俺が連れてってやるが？」

だがプリンは首を横にふって拒絶した。

サウロの言うとおり、この自由なひと時に会話が成立する者はいなかった。

決められた動きをして、決められた会話をする。

沢山の人がいるのに、二人ぼつちな寂しさにプリンは身震いした。

「この人たちは悲しくないのかしら？」

「自分という存在すら認識できてないだろうよ」

「どういう事？」

「石や木が感情を持って自分が悲しいなどと思うのか？」

「あんた冷たいね……」

涙目にじむプリン。

「魔王だからな」

そっけなく答えるサウロ。

二人は並んで日の下の町並みを歩く。

どこに向かうでもなくブラブラと。

急にプリンが立ち止まった。

「なら、以前のスライムはどうなのよ!!」

知能低いつて言ってたけど会話は成立したわ!!」

それは…とサウロが顎を撫でた。

「それは、最初のモンスターだから作者も少しは思いいれがあったんだろうよ」

そんな会話を続けるうちに二人の心に暗い雲がかかる。

全てがムダではないのか？自由などないのではないか？

やはり、そう思った事自体がおかしいのではないか？

「もうやめるか？」

サウロが優しく頭一つ下のプリンに問いかけた。

だが自分に言い聞かせるようにプリンは力強く答える。

「嫌よ！！」

いきなり世界がゆっくりと揺らいだ。

「物語が少し進んだわ」

「だな…今回は少し展開が遅かったな」

二人で体で次の設定を感じ取る。

「ほう、次は砂漠の町か、名前はオアシス」

「そこに勇者が向かうわけね」

次々にゆっくりと展開が二人の体に染みて行く。

「ふむ、そして砂漠の真ん中の遺跡にてボスと戦う」

「ん？なんか女王云々とか、ええっと…なにこれ」

プリンが啞然としてサウロを見やる。

「あんたの昔の恋人だあ？」

返答に困ってサウロは黙った。

所詮は自分の運命など作者次第だ。

「あ、なんか消えた。ええっと設定書き直し」

「私の昔の知り合いで私に惚れていた女王だそうだ」

サウロは苦笑した。

プリンは気の毒そうにサウロの背中をパンパン叩く。

「とりあえず帰るか」

「うん」

二人は手を繋ぎ、来た時と同じように魔王の城に帰還した。

砂漠の町オアシス

砂漠の町 オアシス

過酷な砂漠地帯の中で唯一の水場。

そこに人々は集い、そして町を形成した。

移動商人達がそれぞれの各地の珍しい品を売る。

「昔の知り合いで、あんたに惚れていたねえ」

魔王サウロは自分をジロジロとみつめる視線を無視する。

ただっ広い、薄暗い魔王の城の王座に座るプリン。

別段と気にした風もなくサウロは立ち尽くす。

先ほど、物語の更新があつたばかりなので

次の更新まで間が空きそうだ。

つまりは、自由の時間。限られた檻の中での自由。

「どんな顔なのかしら？」

人事だと思って暢気なプリン。

「さて、どうするか…」

二人で思案する。

現在の移動候補は

・ 砂漠地帯

・ オアシス

・ 遺跡迷宮ピラミッド

「勇者の位置は砂漠のレベル上げで停止しているな」

プリンが提案する。

「モンスターの意見を聞いてみましょうよ。」

この前みたいなスラリンみたいなのを探してみようよ」

サウロはプリンの意図に気づいたが却下した。

確かに自分はモンスターの王であり、彼らは命令には従う。

けれど運命を止める力は自分にはないのだ。

それに…

「砂漠の敵はミミズワームらしい。知能はほぼ期待できん。

つまりは会話は不成立というわけだ」

プリンは不満そうだが納得した。

「なら、勇者は？」

「まだ近づくのは俺としてはゴメンこうむりたいな」

プリンとサウロは無言で互いに思い出す。

物語の進行の上とはいえ、どうしてもスラリンを倒した勇者モナに

まだ快く近づけそうになかった。

今は避けたい。

そして移動先の結果は

「オアシスね」

「まあ、あまり期待はできないがな」

城下町と同じ、繰り返し会話の設定しかないキャラのみなら

行っても会話は成立せずに無意味になる。

だが、それでもここにいるよりは気がまぎれそうだ。

サウロは自分自身の心理変化に少し怪訝に思う。

憂鬱な精神の設定ではあるが、プリンに感化されたのだろうか？

「ほら、また男前が眉間にシワ寄せて悩まない。

悩む位なら、とつたと行動しましょう」

ある意味羨ましいと思いつつ、プリンの手をとり瞬間移動をした。

「なんか雰囲気あるわね」

オアシスは湖を囲い、移動式住居のテントが建っている。

ラクダが何頭も木に繋がれて、道行く人々も羽織を被る。

色々な人がそれなりに行き交う中、誰も二人に声をかけない。

プリンが町娘の軽装・サウロは人の姿に魔法がかかっている。

「つまりは固定キャラで会話もお決まりって事だな」

サウロはため息をつく。

プリンが試しに近くの女性に声をかけた。

「ちょっとお話しいいですか？」

「あらこんにちは。ナツメの実はいかが？」

「いえ、あのお話を…」

「あらこんにちは。ナツメの実はいかが？」

ダメだこりゃと両手を挙げてサウロの元に戻ってきた。

サウロも苦笑する。

「ただ話しがしたかっただけなのにね」

少しでも何か掴めたら、それだけなのにとプリンは思う。

そんな気持ちを察してかサウロが提案した。

「話が出る可能性がある人間だな」

ふむとサウロは頭をひとかきして

「可能性があるのはキャラバンのリーダーだな」

まだ少しは設定され、勇者モナを遺跡に導く彼なら

少しは会話が成立するかも知れない。

二人で一番大きなテントに向かう。

中にいたヒゲ顔の中年男が二人に声をかけてきた。

「おや？まだ出番はまだのはずですが…ええっと」

二人の設定を思い出そうとしているのか、頭を抱える。

だが浮かぶはずもない。

当たり前だ。本来ならいてはならぬ存在なのだから。

「この人しゃべれる！！やったー！！」

無邪気にはしゃぐプリン。

ピョンピョンと横で跳ねるのを無視してサウロは説明した。

いわく、自由時間に移動している事。

いわく、設定に疑問を持つこと。

そして、何かをかえる方法がないか探している事。

キャラバンの男は不思議そうな顔をする。

「そんな疑問すら浮かびませんね」

「普通はそつだな」

サウロも納得する。自我が芽生えた事すら不思議なのだ。

「ですが、それを言ったら、今現在会話をしている私もバグですか

ね？」

「バグ？」

二人は顔を見合わせる。

「ええ、設定ミスって事だと思っただけですが…」

設定ミスという言葉にサウロとプリンは固まる。

「いえね、私実は別の話でも使われる存在だったみたいです。

いや、これはこの話の設定には関係ないのでお二人は知らないでしょうがね」

「別の話？」

「ええ、この世界はあくまで一つの作品の世界なんです。

でも、別にも沢山の作品の世界がありまして…」

初耳だった。そんな発想すらなかった。

男は話続ける。

「なので、あくまで私は別の世界を知っています。

それすら本来なら知らない知識でしょうけどね。

で、その別世界では想定外の事をバグといいます」

プリンが男の肩を力任せに揺さぶった。

「何それ！もつと教えてよ！！！」

ブンブンと男の体が揺さぶられ目を白黒させる。

サウロはプリンを止めて男に話を促す。

「それで？」

「いえ…その…」

肩を揉みつつ男は答える。

「それだけですな」

「他の世界に行く方法は！！ないの！！！」

プリンが必死で聞いた。

「おい、プリン」

止めるサウロにプリンはピシヤリと言う。

「他の世界なら私達は違う運命かも知れないじゃない！！！」

プリンは必死だった。

だがサウロは否定する。

「違う運命でも、自由ではないな」

その言葉にハツとした顔でプリンは静まり返った。

「あくまで私達は作られた世界のキャラですし受け入れるのが当然ですな」

男は言う通りだった。

サウロは男に聞いた。

「お前は自由が欲しくないのか？」

男は即答する。

「なぜです？」

そして二人はテントを去った。

もう聞く話はなかったからだ。

プリンは黙り込んでいた。

サウロは肩に手を添えて、自分の城に連れ帰った。

玉座の裏でプリンは肘に顔を埋めたまま座り込んでいる。

黙って付き添っていたサウロが聞く。

「もう、やめるか？」

プリンは無言で首を横に振る。

「そうか…」

そして黙ってプリンの方に立ち尽くす。

どれ程に時間がたっただろうか。

静かな部屋にプリンの声だけが小さな声で聞こえた。

「やっぱり無理なのかな？」

弱々しい声だ。

サウロは答えない。

少し間が空いて、また再びプリンが口を開く。

「無理なのかな？運命とやらから、設定から自由になるなんて。

私は勇者と姫と三角関係になって…そして最後はどうなるんだろ？」

それはまだわからなかった。

全ては作者次第で、そこまでの設定は出来ていない。

いや、それすらも途中で変えられて魔王であるサウロに殺される運命すらありえるのだ。

「ただの宿屋の娘なら良かった…」

また顔を伏せた。そして…

「あんたが殺されるのはなんか嫌だ」

サウロが言う。

「お前らしくないな。人を半ば強引に連れ出しておいて憎まれ口にもプリンは反応しなかった。

「今更どうしようもないが、一つ収穫はあっただろうがピクリとプリンの頭が動いた。

「バグだそうだ。想定外の事。我々がそうだとしたら

それはそれで可能性が出来たという事だろう？違うのか？」

ゆっくりとプリンがサウロの顔を見上げる。

「どづいつ事？」

「お前は案外馬鹿だな」

「なっ！」

やっとプリンにも元気が出てきたようだ。

「想定外という事は、予測できんという事だ」

「だから、どういっ…」

「予測できない、それが自由だというのが我々だ」

プリンが目を見張る。

そしてバツと立ち上がりサウロに抱きついた。

突然の事でサウロは固まった。

「そうよ！！私達は自由なんだわ！！あなたの言う通りよ！！」

体から離れ、今度はサウロの手をとって万歳をする。

「ならこの世界から抜け出せる方法も予測不可能にあるかも知れないわ」

「世界から？」

「そうよ！！あなたと私が幸せを迎える世界」

ニコッとプリンがサウロに笑いかける。

サウロは何か言いたげな顔を一瞬したがやめ

かわりに少し微笑み返した。

迷宮でレミッド

二人は魔王の城の中にいた。

この城の主が言う。

「さて、今度の出番はまだ時間がかかりそうだが」

姫の替え玉として攫われてきたプリンは

なぜか壁をスリスリと触っている。

怪訝に思ったサウロが聞いた。

「何してるんだお前は？」

「あ、なんか隠し部屋とかないのかな？なんちゃって」

とペロツと舌を出して誤魔化した。

サウロは目頭を手で覆う。

「そんな設定はないな」

「だよね、つまんない」

自分のせいかとサウロは思ったが言うだけムダなので黙った。

「ここにいってもつまんないし…そうね」

「どじする？」

「勇者モナに会ってみようか？」

サウロは不愉快そうに目を細める。

「なぜだ？」

「いや、あのさ」

サウロが不機嫌になったのを感じて、慌ててプリンは手を振った。

「だからさ、そんなに嫌う事ないじゃない」

「そついう設定でな」

「だからさ、設定だとそうだけどさ、私達ってバグなんですよ？」

「らしいな、だから？」

「だから一番設定が組み込まれているモナなら会話が成立するかもよ？」

プリンは必死にサウロを説得する。

だがサウロは切り捨てた。

「会話だけならな」

「だったらさ会っても…」

「会って話してどうする？戦闘になったら？」

「え？」

サウロの一言にプリンが固まる。

「なんで？え？」

「だから、俺とモナは運命が違う。つまり奴にとっては

全てが奴の栄光への踏み台みたいなものだ」

「でも疑問に…」

「自らの設定に満足していたらどうする？」

「う…」

プリンが言葉につまる。

「そして設定外の戦闘が起こり、そして互いに戦えば…」

「戦えば…」

サウロは息をゆっくりと吐きながら呻く。

「全ては終了するな」

「…」

「あくまで俺の予想だがな」

プリンは否定しなかった。いや、できなかった。

その通りだ。既に自由に動き回っているのがオカシイのだ。

バグ。そのうえで致命的なバグが起こったとしたら？

想像すらできないが、まっているのは終了でしかない。

すなわち自分達も含めて全てが消える。

物語が進行できないのは致命的だった。

もがけばもがくほどに絡まる糸のようだとサウロは思う。

だが、それでも短い自由の時間が嫌だったかと言われれば

サウロは否と思うのだ。

結果はどうであれ、あかく今こそ自分は自由なのだ実感する。

それが不思議と心地よいのだ。

「なら…」

プリンは顔を上げる。

「なら、モナは一番最後にしよう」

サウロも、それに頷いた。

「ともかく今は…んーと、砂漠にいるのねモナ。

だったら別の場所に行ってみましょう」

サウロは即答した。

「一つしか残ってないな。現時点において遺跡ピラミッドのみだ」

「なら決まりよ！…そこに行きましょう！…」

パチンとプリンは威勢良く指を鳴らしたが

イマイチ音が気に入らないらしく、何度も指を鳴らす。

苦笑しながらサウロはプリンのその手をとった。

不思議そうに頭一つ上のサウロを見上げるプリン。

「あまり気は進まないが行ってみよう。ここにいっても仕方ない」

「そうね」

そして二人の体は瞬時に移動した。

藁でも掴む気持ちで二人はダンジョン内を進む。

ピラミッド内は煌々と松明が焚かれ視界には困らない。

ただひたすらに、二人は設定通りに奥に住まう主のもとに向かう。

会話ができるモンスターとの遭遇は一切なく

数回程度のザコモンスターの遭遇はサウロの姿を見ただけで去っていった。

「ムダな戦闘をしなくて済んだだけ有難いな」

「本当ね」

サウロの言葉にプリンも同意する。

戦闘になればサウロは負けないだろうが

非戦闘員キャラのプリンは見守るだけであるし

何より設定バランスが消える可能性がある。

何が起るかわからないバグとはいえ、変化は極力抑えたかった。

二人して狭い通路をひたすら歩く。

サウロが先頭に立ち、罠などを警戒する。

いつ作者が思いつきで設定をいじるか、わからない危険もある。

本当に作者という神の手のひらの上だな…

自嘲気味にサウロが口の端で笑うと、プリンが気味悪そうに

「その顔やめてくれる？」

「なぜだ？」

「悪者みたいだから！」

「…」

どれ程に歩いただろうか、ひときわ大きな朱色の扉の前に辿り着いた。

「ここね」

「そつだな」

先頭のサウロが感慨深げに扉を開ける。

ギギツと重い音をたてて、あっけなく扉は開いた。

中はただ広く、周囲が水で囲まれ

扉から一直線に通路と、そしてその先の王座が島のように浮いていた。

壁は大理石なのか白く輝き、美しい彫刻で飾られている。

「案外、趣味いいわね」

プリンがため息をつく。

王座には人影がある。

それこそが、この迷宮ピラミッドの女王。

彼女に会うために二人はやって来たのだ。

二人が歩き王座に近づくとつれ

人影がはっきりと、その容姿さえわかる距離に近づいてくる。

「何用じゃ」

その女は言う。

「まだ出番ではないであろう！控えい！」

人に命令するのに慣れているふうであり

一瞬プリンはギクツと身を竦ませて

平然としているサウロの服の裾を握った。

二人は彼女の前に立つ。女は座ったままだ。

目のふちを黒くふちどり異国情緒溢れながら気品に満ちた美しさ。

そう、この女こそ女王ナノーケ。

迷宮ピラミッドにて勇者モナと敵対するボス設定の存在。

そして

「サウロ様！貴方様はサウロ様ではないですか！！」

女王ナノーケはサウロの足元にひれ伏す。

先ほどまでの威厳と高飛車な態度とは雲泥の差だ。

「ああ、なんと嬉や、わらわの元に愛しきサウロ様が」

媚びるようにサウロを見上げるナノーケ。

だがサウロは何の感情も湧かず、冷徹な表情で見下すのみだった。

ナノーケは真横にいるプリンなど目に入らぬかのように

ただ一人でひたすらサウロに熱く語る。

「この迷宮に籠って、世を捨てた身とて、貴方様の事は忘れた事などありません」

スラリとした肢体をくねらせ立ち上がる。

形の良い腕をサウロの肩にそつと乗せた。

「ああ感無量…もうわらわは死んでもいい…」

「死ぬ前に話しがしたいんだが」

サウロはグツとナノーケの手を掴み振りほどいた。

「何でございましょう。わらわは貴方様の為なら…」

「いや設定とは無関係で頼む」

ナノーケはその言葉に首をかしげる。

そして不思議そうにサウロだけを見つめながら王座に座った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6185z/>

テンプレワールド～魔王は退治されたくありません～

2012年1月7日11時52分発行